

平成30年2月9日

鹿児島大学大学院人文社会科学研究科長 殿

学位（博士）論文審査の概要及び結果報告書

地域政策科学専攻 氏名 宋 多情

学位論文題目

島嶼のエコツーリズムと世界自然遺産—奄美群島の事例を中心に—

(Ecotourism and World Natural Heritage in Islands of Japan: with a focus on the case of the Amami Islands)

論文審査の概要

1. 本論文の目的

本研究の目的は第一に、戦後の奄美の観光史のなかでエコツーリズムの成立過程を跡づけ、ホストという視点から奄美のエコツーリズムの実態を詳細に記述するとともに、世界自然遺産として登録された屋久島や小笠原諸島、登録予定の西表島のエコツーリズムとの比較によって、奄美のエコツーリズムの実態と特徴を明らかにすること、第二に、島嶼のエコツーリズムという新たな観光形態が奄美社会や人類学の観光研究にどのような意味を持つのかを考察することにある。

2. 本論文の構成

本論は、7章から構成され、第1章では研究目的、研究の背景、先行研究、研究方法が示され、第2章では奄美のエコツーリズムとの比較の事例として屋久島や小笠原諸島、西表島を取り上げ、第3章では奄美群島におけるエコツーリズムの受容について行政の視点から分析する。第4章と5章では奄美大島と徳之島のエコツアーガイドについて定量的および定性的分析を試み、第6章では、奄美市住用町の地域住民の視点から、その自然環境に対する価値認識について考察する。第7章では、ホストの視点から屋久島や小笠原諸島、西表島の事例と比較考察を行い、第8章では各章の考察を整理して結論とする。

第1章「序論」では、本論が、ホストの視点から奄美のエコツーリズムの研究であり、ホスト社会を構成する主体として「行政」、「ガイド」、「地域社会」を想定し、この3つの視点から奄美のエコツーリズムの実態と特徴を明らかにすることや、奄美社会および人類学の観光研究にとってエコツーリズムという観光形態の持つ意味について考察することを述べる。また、エコツーリズムの概念やエコツーリズムと世界自然遺産、島嶼とエコツーリズムの関係について整理した後、先行研究により本研究が、奄美大島と徳之島のエコツーリズムに関する初めての本格的かつ体系的な研究であると位置づける。

第2章「日本の島嶼における世界自然遺産とエコツーリズム」では、屋久島・小笠原諸島・西表島を日本国内におけるエコツーリズムの先進地として取り上げ、各島のエコツーリズムの成立やその後の影響について整理した後、「価値の発見者」、「ガイドの性格」、「世界自然遺産との関係」という観点から比較考察する。価値の発見者という視点から、屋久島は移住者、小笠原諸島は商工会、西表島は環境庁であること、ガイドの性格という視点から3島とも移住者が多いこと、さらに、世界自然遺産との関係から、屋久島は、島に対する住民の認識を大きく変え、エコツーリズムの発展を後押ししたのに対し、小笠原諸島は陸域の自然環境の価値が評価され、陸域ガイドが増加するきっかけとなったこと、また、西表島は、環境保全における管理や制度の構築が不十分であることを指摘する。

第3章「奄美群島におけるエコツーリズムの受容」では、奄美群島の自然観光資源をめぐって、行政（鹿児島県）とガイド（初期のガイド）が、それぞれどのようにエコツーリズムを認識し、受容したのかを明らかにする。まず、奄美群島のエコツーリズムは、行政（鹿児島県と奄美群島振興開発事業）が主体として受容した「国策としてのエコツーリズム」であることを確認する。次に、ガイドについては、自然観察会・自然保護運動に関わった人々の動き（1980年代後半～90年代）に注目し、初期のガイドたちは「アウトドア体験」や「自然体感ツアー」など独自のツアー形式を確立した上で、外部からの理論としてエコツーリズム概念に接したが、自分たちの実践を「エコツーリズム」と積極的に名乗ることはなかったことから、彼らにとってのエコツーリズムの受容とは「言葉の受容」に過ぎなかったと分析する。

第4章「奄美大島のガイド」では、世界自然遺産推進における取り組みの一つとして行政（広域事務組合）が行なったガイド組織とエコツーリズムの制度化の過程を明らかにし、また、ガイド組織に所属する奄美大島のガイドたちが自然環境とどのように関わり、ガイドとして位置づけられてきたのかを、それぞれのライフヒストリーから検討する。さらにガイドと自然環境との関係を捉えるために、実際のツアーに参加し、ガイドがツアーの参加者に伝える内容を詳細に記述する。そして、登録ガイドの半数以上が、島出身者（Uターン者）であることと、その特徴として、「自然観察会または自然保護活動」と「個人的選択」という2つの形で自然環境とかわりを持ってきたことを指摘する。

第5章「徳之島のガイド」では、徳之島におけるエコツーリズムの特徴について、ガイドを必要とする観光が成立していないことから、ガイド業従事者が非常に少ない上に、行政が立ち上げたガイド組織が機能しておらず、地元のNPO組織が代役を果たしていること、さらに、環境教育・自然保護活動に重点を置くNPO法人といった立ち位置から、ガイド業をビジネスとしてよりは自然保護に有効な手段として活用していること、さらに、会員のほとんどは、行政のエコツーリズム推進によってエコツーリズムという言葉や概念に接してきたことを指摘する。

第6章「地域住民の価値認識」では、まず、奄美市住用町を事例として、地域住民が周囲の自然環境をどのように認識し生活に利用してきたかを記述する。そして、マングローブ群生地は、「当たり前存在する自然の風景」であり、みんなで共有する「採集の場」や「遊戯の場」ではなかったことや、市道スタルマタ線も限られた人（生活圏内・林業従事者）しか利用しなかったことを指摘する。また、地元メディアの報道によりアマミノクロウサギへの関心が増えたことから、「世界自然遺産になりうる自然環境」といった外部

の評価が住用町の住民の価値認識に影響をもたらしたことや、一部の地域住民の中では、市道スタルマタ線の保全など以前はなかった「地域住民としての」働きかけが生じていることを指摘する。

第7章「考察」では、まず、ホストという視点からの比較考察として、エコツーリズム展開における行政、ガイド、地域住民の対応について、また、人類学研究における奄美のエコツーリズム研究の意義について考察する。

第8章「結論」では、第一に、ホストの視点から奄美群島（奄美大島・徳之島）を、屋久島・小笠原諸島（父島）・西表島と比較した結果、行政の働きかけが最も大きいのは、西表島で、次に奄美群島、屋久島と続き、最も小さいのが小笠原諸島であること、ガイドの外部性は、奄美群島と小笠原諸島が両極にあることで、ガイドと地元住民との間に摩擦がなく、屋久島や西表島が両者の中間に位置すること、地域住民の視点から、奄美市住用町では、実際にエコツーリズムに関わり、関心を持つのはごく一部の住民に限られると指摘する。第二に、「言葉の受容」について、ガイドという主体が、行政の動きにある程度影響を受けながらも、ガイド自らの価値認識のもとに自然環境を選択し商品化を行ってきたことを明らかにした上で、初期の奄美大島ガイドに見られた「言葉の受容」という特徴は、奄美大島のガイド全体と徳之島においても適用されるものであること、第三に、ホストとエコツーリズムの関係性については、ホストが具体的に誰（行政、ガイド、地域住民）なのかによってエコツーリズムとの関係性が異なってくると分析する。最後に、人類学における観光研究は、1970年代に「ホストとゲスト」の研究から始まったが、人類学者によるエコツーリズム研究を含めた観光研究は1990年代末には縮小して現在に至っていることから、本研究は、国内のエコツーリズムの研究を、これまでの社会学や経済学の政策論的な視点からではなく、また、従来の人類学の批判的な研究でもなく、「ホストとゲスト」という人類学の原点に再度立ち返って、「ホスト」、とりわけガイドの視点から対象社会のエコツーリズムという観光現象を捉えようとした研究として位置づけられると結論する。

### 3. 本論文の評価すべき点

第一に、最も評価すべき点は、本研究が、これまでほとんど研究蓄積のない奄美の観光およびエコツーリズムに関する最初の本格的かつ体系的な研究であるということ、第二に、「ホスト」という視点からのアプローチは、研究テーマの発掘という点からも評価できること、第三に、申請者が奄美大島と徳之島の全てのガイドに対して行なった調査資料は、質量ともに優れ、人類学的にも価値あるものとなっている点である。第四に、本研究は、屋久島や小笠原諸島、西表島といった世界自然遺産に関係する全ての島嶼のエコツーリズムに関する本格的な比較研究であること、最後に、1990年代末以降、関心が薄れていた日本の観光人類学、とりわけ国内のエコツーリズムに関する人類学的研究に「ホスト」の視点から、新たな研究の切り口を提示できた点が高く評価される。

### 4. 問題点

まず、世界自然遺産とエコツーリズムの関係について研究の掘り下げが十分とは言えず、「世界自然遺産」概念の受容過程もエコツーリズムの受容過程と同じ「言葉の受容」

ではないのかといった疑問や、地域住民はエコツーリズムに無関心だというが、むしろ、身近な空間に関心あるものに引き寄せたのがエコツーリズムなのではないかといった点、さらに、ガイドという視点は海域も含まれるが、なぜ海域を入れなかったのかといった点などに疑問が残る。また、ガイド同士の関係をガイドになる前の段階からみていくガイドの形成史について踏み込んだ分析が足りない点や、ガイドのバックグラウンドの違いによるガイドの分類の分析が足りないこと、さらに、ガイドについて、観光業者なのか、ボランティアなのか、保護団体なのか、その立ち位置の違いをもっと丁寧に描いて分析すべきではなかったかといった点が問題点としてあげられる。

#### 5. 総合評価

本論文には、以上のようないくつかの問題点を指摘できるが、これまでほとんど研究されていない奄美群島のエコツーリズムに関する最初の本格的な人類学的研究という点と、ホストの視点からガイドに注目し、他の島嶼との比較研究から奄美のエコツーリズムの特徴を明らかにした点に独創性が見られること、さらに、「ホストとゲスト」に始まる人類学の観光研究に「ホスト」の視点から展開した研究の切り口は、人類学の観光研究に新たな知見をもたらし、その研究の可能性の幅を広げることができた点は高く評価できる。よって、審査員全員が一致して、博士（学術）の学位を与えるに十分な学力と見識を有する研究であると認定した。

授与する博士学位 学術

論文審査結果 合

審査委員

主査 桑原孝樹

副査 萩野 誠

副査 渡辺芳郎 印

副査 須山 聡

副査 山本宗立